

## 平成 26 年長崎平和宣言

69 年前のこの時刻、この丘から見上げる空は真っ黒な原子雲で覆われていました。米軍機から投下された一発の原子爆弾により、家々は吹き飛び、炎に包まれ、黒焦げの死体が散乱する中を多くの市民が逃げまどいました。凄まじい熱線と爆風と放射線は、7 万 4 千人もの尊い命を奪い、7 万 5 千人の負傷者を出し、かろうじて生き残った人々の心と体に、69 年たった今も癒えることのない深い傷を刻みこみました。

今も世界には 1 万 6 千発以上の核弾頭が存在します。核兵器の恐ろしさを身をもって知る被爆者は、核兵器は二度と使われてはならない、と必死で警鐘を鳴らし続けてきました。広島、長崎の原爆以降、戦争で核兵器が使われなかったのは、被爆者の存在とその声があったからです。

もし今、核兵器が戦争で使われたら、世界はどうなるのでしょうか。

今年 2 月メキシコで開かれた「核兵器の非人道性に関する国際会議」では、146 か国の代表が、人体や経済、環境、気候変動など、さまざまな視点から、核兵器がいかに非人道的な兵器であるかを明らかにしました。その中で、もし核戦争になれば、傷ついた人々を助けることもできず、「核の冬」の到来で食糧がなくなり、世界の 20 億人以上が飢餓状態に陥るという恐るべき予測が発表されました。

核兵器の恐怖は決して過去の広島、長崎だけのものではありません。まさに世界がかかえる“今と未来の問題”なのです。

こうした核兵器の非人道性に着目する国々の間で、核兵器禁止条約などの検討に向けた動きが始まっています。

しかし一方で、核兵器保有国とその傘の下にいる国々は、核兵器によって国の安全を守ろうとする考えを依然として手放そうとせず、核兵器の禁止を先送りしようとしています。

この対立を越えることができなければ、来年開かれる 5 年に一度の核不拡散条約（NPT）再検討会議は、なんの前進もないまま終わるかもしれません。

核兵器保有国とその傘の下にいる国々に呼びかけます。

「核兵器のない世界」の実現のために、いつまでに、何をするのかについて、核兵器の法的禁止を求めている国々と協議ができる場をまずつくり、対立を越える第一歩を踏み出してください。日本政府は、核兵器の非人道性を一番理解している国として、その先頭に立ってください。

核戦争から未来を守る地域的な方法として「非核兵器地帯」があります。現在、地球の陸地の半分以上が既に非核兵器地帯に属しています。日本政府には、韓国、北朝鮮、日本が属する北東アジア地域を核兵器から守る方法の一つとして、非核三原則の法制化とともに、「北東アジア非核兵器地帯構想」の検討を始めるよう提言します。この構想には、わが

国の 500 人以上の自治体の首長が賛同しており、これからも賛同の輪を広げていきます。

いまわが国では、集団的自衛権の議論を機に、「平和国家」としての安全保障のあり方についてさまざまな意見が交わされています。

長崎は「ノーモア・ナガサキ」とともに、「ノーモア・ウォー」と叫び続けてきました。日本国憲法に込められた「戦争をしない」という誓いは、被爆国日本の原点であるとともに、被爆地長崎の原点でもあります。

被爆者たちが自らの体験を語ることで伝え続けてきた、その平和の原点がいま揺らいでいるのではないかと、という不安と懸念が、急ぐ議論の中で生まれています。日本政府にはこの不安と懸念の声に、真摯に向き合い、耳を傾けることを強く求めます。

長崎では、若い世代が、核兵器について自分たちで考え、議論し、新しい活動を始めています。大学生たちは海外にネットワークを広げ始めました。高校生たちが国連に届けた核兵器廃絶を求める署名の数は、すでに 100 万人を超えました。

その高校生たちの合言葉「ビリョクだけどもリョクじゃない」は、一人ひとりの人々の集まりである市民社会こそがもっとも大きな力の源泉だ、ということをお私たちに思い起こさせてくれます。長崎はこれからも市民社会の一員として、仲間を増やし、NGOと連携し、目標を同じくする国々や国連と力を合わせて、核兵器のない世界の実現に向けて行動し続けます。世界の皆さん、次の世代に「核兵器のない世界」を引き継ぎましょう。

東京電力福島第一原子力発電所の事故から、3 年がたちました。今も多くの方々が必要な暮らしを強いられています。長崎は今後も福島の日も早い復興を願い、さまざまな支援を続けていきます。

来年は被爆からちょうど 70 年になります。

被爆者はますます高齢化しており、原爆症の認定制度の改善など実態に応じた援護の充実を望みます。

被爆 70 年までの一年が、平和への思いを共有する世界の人たちとともに目指してきた「核兵器のない世界」の実現に向けて大きく前進する一年になることを願い、原子爆弾により亡くなられた方々に心から哀悼の意を捧げ、広島市とともに核兵器廃絶と恒久平和の実現に努力することをここに宣言します。

2014 年（平成 26 年）8 月 9 日

長崎市長 田上 富久

## ＜伝える2014・ナガサキから＞祈念式典 「平和への誓い」に城臺さん 安全保障政策、思い訴えたい /長崎

毎日新聞 2014年8月2日（土）15:09 長崎版

長崎市は1日、長崎原爆の日（9日）の平和祈念式典で「平和への誓い」を読み上げる被爆者代表に、長崎市三川町の元小学校教諭、城臺（じょうだい）美弥子さん（75）が決まったと発表した。司会は活水高3年の窪田愛菜さん（17）、深沢まぶねさん（17）が務める。【小畑英介】

城臺さんは6歳の時、爆心地から約2・4キロにある祖母の家で被爆した。空が光ったと思った直後、家は爆風にさらされ、床下から助け出されるまでの記憶がないという。戦後は教員として平和教育に携わり、現在も語り部活動を続ける。

記者会見した城臺さんは「今までは恒久平和や核廃絶を願うくらいだったが、今年は集団的自衛権の行使容認の閣議決定などに危機感を持っている」と話した。「誓い」では、国の安全保障政策に対する思いなどを訴えたいという。

窪田さんは、高校で放送部と平和学習部に所属。4月に83歳で亡くなった被爆者、松添博さんが、原爆の犠牲になり振り袖姿で火葬された2人の少女を描いた物語「ふりそでの少女」を広める活動などに取り組んでいるという。窪田さんは会見で「学んできたことや平和への思いを声に乗せたい」と意欲を語った。

式典の概要も1日に発表された。過去最多となる海外52カ国代表（7月30日現在）が出席を予定する。